

---

# イストワール

m e y u u

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

イストワール

### 【Nコード】

N3446I

### 【作者名】

meyuu

### 【あらすじ】

突然の両親の死。

高校を中退し、ホストへなった優羽。

そこで出会った先輩ハル。

運命の女性との出会い。

優羽の数年間の物語。

## 優羽とハルと百合の関係

ハルが仕事を休んでいるので、その日の仕事はいつも以上に頑張った。

店の外には休みのホストの名前が書かれているので、ハルを指名する客は来ないはずだった。

だが、わざわざ店内にハルがなぜ休みなのかと聞きに来る客もいた。その都度、優羽が出て行き対応した。

ハルが休みなら、優羽でもいいわと言う客もいた。

優羽はいつもの倍近い客の接客をこなした。

ハルが居ない店内はなんだか寂しかった。

頼りになる先輩がいないとこんなにも寂しいものなのかと思った。

この日は、ハルの偉大さとハルの人気っぷりを再確認した優羽だった。

仕事が終わるとすぐにハルの住むマンションへと優羽は急いだ。

今日の優羽はとても頑張った。その事を報告し、ハルによくやったと褒めてもらいたかった。

主人に褒められたい一心で、投げたボールをキャッチし、それをまた主人の所へ持ってくる犬のように。

ハルの住むマンションへ到着し、最上階へと上る。そして、チャイムを押した。

「ピンポン」

ガチャリ。ドアが開いた。

出てきたのはハルではなく百合だった。

「あ……」

優羽と百合はお互いびっくりして固まっていた。

「優羽？」

百合の後ろから顔をのぞかせるハル。

「す、すみません。俺帰りますんで」と優羽は帰ろうとした。

「平気よ。今帰るところでしたから」と百合が優羽を引きとめた。

「優羽、中入ってる。下まで百合送ってくるから」とハルは言い、二人は出ていった。

優羽は部屋へ入り、窓から下をのぞいた。

タクシーが一台とまっていた。そのタクシーに百合が乗り帰っていた。

ガチャリ。

しばらくして、ハルが帰ってきた。

「ハルさん、百合さん来てたんですね。」と優羽が言った。

「ああ、優羽に聞いて来たって言うってたな。わざわざ来なくていい

のに。」「とソファアに座りながらハルが言った。

「百合さんが来て嬉しくないんですか？」と優羽は聞いた。

「そうじゃねえけど…あいつ結婚してるし」とため息混じりに言うハル。

「けっ結婚してるんですか?!」と驚く優羽。

「ああ、だから俺が客として、あいつの店に行くようにしてるんだ。」「ハルは少しため息まじりに言った。

「百合さん、人妻だったんですか…。だから、ハルさん人妻もののAVばかり持つてるんですか?」と真剣に聞く優羽。

「お前、また俺の勝手に見たたる!次から金取るぞ!」と怒鳴るハル。

「百合さんはハルさんの事好きだと思います」と話しをそらす優羽。

「…百合は、俺がホスト始めた頃に付き合ってた女なんだ。」「ハルが話した。

「じゃあ、百合さんはハルさんの元カノ?」

優羽が聞いた。

「そうなるな。あの時の俺は自分の事でいっぱいばいで百合の事大切にしていられなかった。」「ハルが悔いるように話した。

優羽は黙って聞いた。

「でも、百合はそんな俺を好きでいてくれたんだ。百合が働いてる

店の社長が百合の事気に入ってさ、百合に結婚を申し込んでんだ。それを聞いて俺は百合の事手放した。俺は百合を幸せにする自信がなかったんだ」と下を向きながらハルが話してくれた。

「そうだったんですか。でも、まだお互い好きなんですな」優羽が聞いた。

「いや、百合が幸せなら俺はそれでいいんだ。もう、俺のものにしようなんておもわねえよ。でも…」言葉を詰まらせるハル。

「なんですか？」と聞く優羽。

「……………」

チラツと優羽の事を見たハルは話しをさえぎった。

「いや、俺の事はいいんだ。それよりお前、今日は大丈夫だったか？」とハルが聞いた。

「あ、はい。大丈夫でしたよ」と言い、今日の事をハルに報告した。

「迷惑かけて悪かったな。良くがんばったな」とハルが褒めてくれた。

「迷惑じゃないです。」と言いながら褒められた事が嬉しかった優羽。

「ハルさんは体の調子はどうですか？」と優羽もハルに聞いた。

「ああ、もう全回復した」とほほえみながらハルが言った。

それを聞いて優羽も安心した。

「お前明日はデートだろ？失敗すんなよ」ハルが優羽に言った。

「はい！それじゃ、俺帰りますね。」優羽は立ち上がりながら言った。

「おう！じゃあな」ハルが言った。

優羽はハルのマンションを後にし、自宅へと帰って行った。

優羽はベットの中でハルと百合の事を考えていた。

「でも……」ハルはその後何を言おうとしていたのだろうか？

それに、百合がハルを見る時の目が少し寂しげだった。百合は今幸せではないのだろうか？

……………

そんな事を考えながら優羽は眠りに落ちていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3446i/>

---

イストワール

2010年10月28日03時11分発行